鬼怒川上流ダム群水源地域ビジョン

水源郷わくわく通信

第７号

鬼怒川ダム地域創生シンポジウムが開催されました

この水源郷わくわく通信は、水源地域ビジョンの取り組みの様子を、皆さまにお知らせするために発行するものです。

発　行　:平成28年4月15日
お問い合せ先:国土交通省　関東地方整備局　鬼怒川ダム統合管理事務所　調査課
宇都宮市平出工業団地１４－３　電話:０２８－６６１－７７６４

水源地域ビジョンとは

「水源地域ビジョン」は、ダム水源地域の自治体、住民等がダム事業者・管理者と共同で策定主体となり、下流の自治体・住民や関係行政機関に参加を呼びかけながら策定する水源地域活性化のための行動計画です。

平成28年3月3日に鬼怒川ダム地域創生シンポジウムを開催

栃木県総合文化センターで３３０人を集め開催

鬼怒川上流ダム群水源地域ビジョン策定委員会では、鬼怒川上流ダム群の役割と効果、また鬼怒川上流域の地域振興と活性化を図るためのヒントを得るために、学識経験者やダム愛好家などの有識者をお迎えし、本年３月３日に宇都宮市内の栃木県総合文化センターでシンポジウムを開催しました。

来賓には、栃木県の福田知事、日光市の斎藤市長らをお招きし、国土交通省関東地方整備局長からの挨拶で始まりました。来賓の皆さまからは、昨年９月に発生した関東・東北豪雨水害で亡くなった方や被害に遭われた方へお悔やみとお見舞いのお言葉をいただくとともに、鬼怒川上流ダム群の重要性や水源地域の活性化を積極的に推進していくことが必要であるとの指摘を受けました。

関東地方整備局石川局長

栃木県福田知事

日光市斎藤市長

シンポジウムでは、基調講演とパネルディスカッションを行いました。

■基調講演１　跡見学園女子大学准教授・篠原　靖氏
演題　「大切な治水対策とインフラを活用した観光まちづくり」

■基調講演２　ダム愛好家・星野　夕陽氏
演題　「水害に対するダムの貢献」

■パネルディスカッション
テーマ　「鬼怒川上流ダムの防災と地域活性化に向けて」

◆パネリスト
斎藤文夫氏（日光市長）
福嶋真理子氏（CRT 栃木放送アナウンサー）
星野夕陽氏（ダム愛好家）
西島佳子氏（JTB 関東法人営業水戸支店）
田畑和寛氏（鬼怒川ダム統合管理事務所長）

◆コーディネーター
篠原　靖氏（跡見学園女子大学准教授）

パネルディスカッション風景

※鬼怒川ダム統合管理事務所ホームページはコチラ。
http://www.ktr.mlit.go.jp/kinudamu/

鬼怒川ダム　検索

シンポジウム内容をお知らせします

会場には３３０人もの多くの方々がおみえになり、鬼怒川上流地域はもとより、東京や群馬からも参加がありました。また、シンポジウム内容については、「もう１度聞きたい」「２回目を実施してはどうか」などのご意見もいただきました。

基調講演１「大切な治水対策とインフラを活用した観光まちづくり」
跡見学園女子大学准教授・篠原靖氏

篠原さんは、現在、跡見学園女子大学で教鞭をとられていますが、以前は東武トラベル㈱に勤務され、栃木県内の旅行商品の企画開発を担当されていた方です。そのため、栃木県内の情報も踏まえ具体的に講演していただきました。

篠原さんは、今後の観光のあり方は、少子高齢化の中で、外国人観光客をどのように取り込んでいくのかを考えていくことが重要であること、ダム等のインフラを観光資源として活用しながら防災教育にも発展させていく必要があると指摘されました。

また、今後の観光の流れは「コンビニ型観光（いつでも、どこでも、どなたでも）」から「寿司屋型観光（今だけ、ここだけ、あなただけ）」の方向に動き、“今だけ（この時期に行かないと見られない）”“ここだけ（この場所に来ないと見られない）”“あなただけ（来てくれた人のみに）”のように限定した絞り込みの中で、楽しんでもらえるようにする必要があるとのお話しをいただきました。

基調講演２「水害に対するダムの貢献」
ダム愛好家・星野夕陽氏

星野さんは、ダムの洪水調節などの操作方法に関心の高いダム愛好家で、日本ダムアワード※の選考委員も務めている方です。講演内容は、記録的な豪雨をもたらした昨年９月の水害時に鬼怒川上流の４つのダムが、どのようなダム操作（洪水調節）を実施し、下流の水害被害を軽減したかを具体的に説明していただきました。

主な内容は、①鬼怒川４ダムは適切な操作を行い与えられた使命以上の仕事をして被害軽減に効果を挙げた。②記録的な洪水を防ぐことは出来なかった。③気象予測の技術は進歩しているが、雨の降り方が変わりまだまだ予測困難である。④雨の予測が困難なためダム操作自体も困難を極め、上流にダムがあるからといって治水に対する過信は禁物である。⑤ダム操作（洪水調節）を結果論で評価するべきではない、などです。説明はわかりやすく、国土交通省の職員も脱帽するほどの内容でした。

※日本ダムアワードとは
毎年、一年間のダムの活躍を振り返り、ダムファン有志による選考委員が様々な角度から活躍したダムをノミネート。選考委員と観客の皆さんによる投票で、各部門で今年もっとも印象に残る働きをしたダムを選出し、その功績を讃えよう、というイベントです。
（日本ダムアワードHP を参考に作成）

パネルディスカッション

パネルディスカッションは、基調講演をしていただいたおふたりを含め、６名の方々によって行われました。前半は「昨年の豪雨を踏まえた防災について」、後半は「観光的にダムをどのように活用していくかについて」が議論されました。前半では、「ご近所とのコミュニケーションがとれているか」が重要で、日頃から周囲の人たちと関係を持っていることが災害時に役立つということや、まずは自分たちの生命は自分たちで守ることが必要だ、との指摘がありました。

後半では、湯西川湖で実施されている水陸両用バスの事例を踏まえ、観光体験には“物語性”を持って顧客のニーズに応えることが必要であることや、ダムを観光資源として積極的に利用していくには越えなければならないハードル（ダムが河川管理施設であり、勝手に人が立ち入れないなど）があることなどが議論されました。

湯西川湖で運行されている
水陸両用バス